

「新しいぶどう酒を」

詩篇 第40篇 1節～4節
マタイによる福音書 第9章 14節～17節

説教 岡村 恒牧師

主イエス・キリストは、「新しい」という言葉を使って、ご自身がいったいどなたであるかお話しになりました。

「だから、新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである。」(17節)という言葉聞いた人々は、最初、「新しいぶどう酒」が主イエスご自身のことだ、などと思いもしませんでした。その後も今日まで、この言葉は様々な場面で、誤って引用されていました。たとえ新しい発想が浮かんでも新しい考え方の枠組みの中で考えないと、結局、上手に生かすことはできない。そういう意味で用いられたりもします。

主イエスと一緒に旅をし、主の話を聞き続け、奇跡を目の当たりにしてきた弟子たちでも、主イエスがいったいどなたかを理解することができませんでした。ずっと後になって、主の霊、助け主なる聖霊が注がれ、新しく造り変えられて初めて、「新しい」という言葉が、本当に新しい世界の到来、今まで誰も見たことも聞いたこともない全く新しい命の話だと、気づくようになります。

先週の水曜日(2月18日)から〈レント(受難節)〉に入りました。主イエスの復活を祝うイースター(復活祭)までの日曜日を除く40日間、世界中のキリスト者が《悔い改め》の祈りを捧げながら過ごします。この悔い改めは、それまでの歩みを後悔して方向修正をする〈改心〉とは違います。進むべき方向を完全に変えてしまう〈回心〉の話です。神に背中を向けて歩んでいた者が向きを変えて、神に向かって歩み始める時、目にする世界は全く違ったものになります。悔い改めというのは、進む方向が反対になって、世界全体が新しい姿で見えるようになる、ということです。

バプテスマのヨハネという人は、やがて到来する救い主のために、人々に悔い改めるようにと奨め、〈悔い改めのバプテスマ〉を授けた人です。このヨハネの弟子たちは、師を失った悲しみの中で断食をしながら、神に祈ることに生活全体を集中して歩んでいました。パリサイ人は週2回の断食を欠かさず、神の言葉に忠実に生きようとした人々です。ですから、彼らにとって、断食をしない主イエスの弟子たちや、その見本を示さない主イエスの姿はとても不思議で、「あなたの弟子たちは、なぜ断食をしないのですか」(14節)と尋ねずにはいられませんでした。

この問いに対して主イエスは、着物につき当てをするたとえと、ぶどう酒を革袋に入れるたとえを用いてお答えになりました。真新しい布ぎれで古い着物につき当てをすると、新しい布ぎれだけがどんどん縮んでいって、着物を破ってしまいます。新しいぶどう酒を古い革袋に入れると、発酵がすすんでいって革袋を破ってしまいます。当時の人なら誰でも分かるあたり前の話です。しかしこの時、主イエスがこの答えで本当に何を言おうとされたのか、誰も理解できませんでした。

主イエスは、断食が無駄だと言われたのではありません。主ご自身も繰り返し断食をし、一人で祈り、神に集中して歩まれました。主イエスは、新しい布ぎれ、新しいぶどう酒という言葉で、ご自分の〈新しさ〉についてお話になったのです。主イエスは、誰も予想しない仕方でも生まれ、人々の期待に関わりなく神の国について語り、とうてい受け入れることができない姿で十字架の上で死んで行かれた方です。主イエスは言葉と行動によって、神の国(支配)が来たことをお示しになりました。悪霊を追い出し、病気の人をいやして、世界の終わりに約束されたとおり、神の力がこの地上で発揮されていることをはっきりとお示しになりました。そうして、これまでとは全く異なる〈新しい時〉が来たことをお示しになりました。

レント(受難節)に、私たちは新しく造り変えて下さる神に祈ります。自分の力では、自分を造り変えて新しい革袋になることはできません。ただ神だけが、私たちを全く新しく造り変えることができます。そして、真実の、新しい命そのものである主イエスを、自分自身の救い主として、私たちの内に迎え入れさせて下さいます。古い、滅びるべき私たちが、新しい命を内に宿して生きようになるのです。主イエスは、私たちを生まれ変えさせ、全く新しく造られた者として生きる者に変えて下さる救い主です。

この受難節に、私たちは心を神に向けて歩みます。ただ憐れみによって新しく造り変えられて、生きる喜びを噛みしめるからです。主がお与え下さる命がどれほど新しく、どれほど激しく発酵し続ける命であっても、私たちは決して破れることはありません。神の恵みを誉め称えて歩むことができる恵みを、神に感謝しつつ歩みましょう。

(記 岡村 恒)